1 『工芸志料　上』黒川真頼著

［東京］博物局，明治 11 年（1878）10 月
1 冊 ; 19cm

明治 11 年のパリ万国博覧会に参加するに際して作成された最初の日本工芸史といえる図書。黒川真頼は江戸・明治の国学者で、明治維新後は官の要職につき広く学会、美術館に貢献した人物。当時は博物局史伝課長心得の職にあり、日本の工芸の起源や盛衰を、諸文献を駆使して説明している。

内容は、織工、石工、陶工、木工、革工、金工（刀剣）、漆工の 7 部からなり、黒川の序によると後で補われる予定であった角工、紙工、画工の部と金工の部の残りは、未収のままである。

2 『織文類纂　巻 5』帝国博物館編

［東京］有隣堂，明治 25 年（1892）1 月
52 丁 ； 25cm

古裂類の文様を分類し集成した木版多色刷の図譜。

博物館での染織文様の模写は明治 9 年の内務省時代から行われ、明治 13 年～14 年には、観古美術会に出品された前田家所蔵の古裂類を模写した記録が残っている。

『織文類纂』は、この時代の各種の繍織の模写の類聚編纂事業の成果として帝国博物館によって編纂され、有隣堂から全 10 冊が明治 25 年から 26 年にかけて刊行された。

各巻とも文様のモチーフに基づいて、天象、器財、禽獣、蟲魚、草木、雑、地理、人類の八項目に分類して文様が配列され、全体の図版数は 1000 図を超える。中には今は失われた作品もあり、織文の集大成として大きな意義を持つ。

3 『帝室博物館図録　第 4 輯』

東京 帝室博物館, 大正 15 年（1926）9 月
図版 120 枚; 38cm

大正 15 年から昭和 13 年まで刊行された大型図録。解説を印刷した薄紙のカバーをつけた一枚刷りの大型コロタイプ図版 10 枚を袋に収めて 1 輯とし、12 輯を 1 期として第 4 期まで全 480 枚の図版から成る。

収録作品は所蔵品が多いが、他の寺社や個人の所有するものも含み、第 4 期の 3,4 輯、5-6 輯、7-9 輯は、それぞれ昭和 9 年 4 月、10 年 4 月の名作屏風特別展覧会と同年 10 月の名作屏風絵巻特別展覧会の出品作品で構成されている。

東京帝室博物館時代に刊行された大型図録には他に、『正倉院御物図録』（全 19 輯のうち、1 輯から 15 輯までを昭和 3 年から 19 年に刊行）や、『御物上代染織文』上・下（昭和 2-4 年）などがある。